来賓挨拶

高知女子大学長
池　川　順　子

みなさんこんにちは。第20回高知女子大看護学会本当におめでとうございます。私は、第16回の学会から来賓としてここに立たせて頂いて、５回目ということになりますが、卒業生が看護学科を出ましてから数えましたら38年になります。その38年の重みというのは、本当に年々蓄積されてきていますが、こうやって５回ここに立ちますと、このプログラムを拝見しましてもしみじみと重みを感じるわけでございます。先ほど山崎智子会長から、今年の渇水についてふれられ、地域で医療従事者としての皆さんの役割もあっただろうと言われましたが、その他今年は政治・社会の大きな変化もありました。世紀末が、特に変わったことがないはずが、何となくその言葉が実感を持って感じられる状況もございます。それぞれ行政の面で、あるいは研究教育の機関で、そして地域のいろいろな施設でご活躍の皆さんが、高知女子大学の卒業生としてこうやって一堂に集まるというのは本当に意義のある、私としても大変嬉しいことでございます。

今から30年近く前になりますが、昭和40年代の初め、私は一般教育の法学を担当していた教員でした。まだ看護学科の施設が南舎の方にいってない時期であったと思います。ですからこの看護学科の学生や先生たちの話が、近くで耳に入ってくるという環境でした。その中で、特に学生が「看護学とは何ぞや」というようなことを問題にして話しているのが私の１つの印象にあったわけです。「何々学とは何ぞや」というのはどの分野にもあるわけです。しかし、新しい全国で初めての四年制大学で看護学を教育研究する機関として高知女子大学の中に発足したわけでございますので、そして、そろそろそういう問題が芽生えだした頃でした。昭和40年代頃だったかなと思います。

その頃学生だった方たちはこの中にもおられますが、今はその看護の分野でトップとか中堅とかで本当に大きな役割を果たしながら活躍をされているわけでございます。そういう「何々学とは何ぞや、看護学とは何ぞや」という問題というのは、いつまでも最後まで問い続ける必要がありますが、その氷山の上の所というだけでなく、その氷山の下の所まで本当に大きくなっていった、そういう経緯というのを私は感じるわけでございます。この後に掲げてあります今回のテーマなどもそういう多くの実践から出てきたテーマだと思っております。

私が女子大で学部長をしておりました頃、10年位前、公立大学というのが34ございました。長い間公立34大学という言い方が続いたわけですが、最近非常に公立大学が増え始めました。そして、今年４月からつまり現在全国の公立大学、つまり自治体が設置している大学というのは48ございます。その中で昨年はご承知のように兵庫県立看護大学がスタートしました。今年はまた大阪府立看

護大学がスタートしました。来年も予定されていますし、その次も。単科の大学だけでなく、一時期の医科大のブームを越えるような感じで看護大のブームが進んでいるわけでございます。

看護大学の一番の老舗である本学の看護学科の発展を願って、私ども取り組んできたわけでございますが、先ほど山崎智子会長が言われたように設置者の高知県が看護学部を、そして大学院をということで取り組みをしておりまして、この秋あるいは今年中という形になると思われますが、看護学部基本計画が出される予定でございます。その他の女子大の部分とか短大とか保育短大とかは遅れますが、それは基本構想という形になりますが、看護については基本計画というもので、そしてそれに続いて基本設計が出されていくことが予定されております。皆さま卒業生のご協力ご支援を頂きたいと思いますし、また皆さまにご期待もして頂きたいと思います。今日は本当におめでとうございました。ご挨拶とさせて頂きます。